『南山神学』46 号（2023 年 3 月）pp. 65-93.

「魂は身体全体の内に存在し，かつそのどの部分の内にも存在しているのであるか」

―トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 10 問題について―

井上　淳

トマス・アクィナスは『定期討論集 魂について』（*Quaestiones disputatae de anima*）の第 10 問題において[1]，「魂は身体全体の内に存在し，かつそのどの部分の内にも存在しているのであるか」（Utrum anima sit in toto corpore et in qualibet parte eius.）という問題について論じている[2]。トマスは，この問題に

---

[1] トマス・アクィナスの著作の執筆年代については J. P. トレルの次の研究書に示されている研究者の間の一般的な見解に従う。Jean-Pierre Torrell, *Initiation à Saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son oeuvre* (Paris: Les Éditions du Cerf, 2015). 邦訳は『トマス・アクィナス 人と著作』保井亮人訳（知泉書館，2018 年）。それによると，トマスの主著とされる『神学大全』の中で人間本性について論じられている *ST* I, qq. 75-119 の執筆は 1267-68 年，その箇所と内容的に密接な関係にあるこの『定期討論集 魂について』*Quaestiones disputatae de anima* の執筆は，それに少し先立つ 1265-66 年である（保井亮人訳，567 頁参照）。

[2] 本稿の執筆にあたっては，主に次の文献を参照した。

Davies, Brian. *Thomas Aquinas's Summa Theologiae: A Guide and Commentary*. New York: Oxford Universituy Press, 2014.

Eberl, Jason T. "Aquinas on the Nature of Human Beings." *The Review of Metaphysics* 58, 2 (2004), pp. 333-365.

FitzPatrick, Mary C. *St. Thomas Aquinas On Spiritual Creatures*. Translated from the Latin with an introduction. Milwaukee: Marquette University Press, 1949.

Pasnau, Robert. *Thomas Aquinas on Human Nature*: *A Philosophical Study of Summa theologiae Ia 75-89*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

_____. *Thomas Aquinas: The Treatise on Human Nature, Summa Theologiae 1a 75-89*. Cambridge: Hackett Publishing Company, Inc., 2002.

先立つ第 9 問題において，魂は媒体を介して物体的質料すなわち身体と合一されているのであるかという問題について考察し，魂は身体の実体的形相（forma substantialis）である限りにおいて，何らかの身体部分の媒介によって身体全体と合一されているのではなく，無媒介的に身体全体と合一されていることを明らかにした。つまり実体的形相として魂は身体に存在を与えているのであり，実体的形相である限りにおいて身体のすべての部分に実体的な特有の存在を無媒介的に与えていることが明らかにされたのである[3]。第 10 問題ではその結論に基づいて，さらに詳細に魂と身体の合一について論じられている。

第 10 問題でトマスが明らかにしようとしているのは主に 2 つの点である。① 一つは，魂は身体全体の内に存在し，かつ身体のどの部分の内にも存在しているのであるかということであり，② もう一つは，はたして魂の全体が身体全体および身体のどの部分の内にも存在しているのであるかということである。

①についてトマスはまず，身体が一つの自然的全体（totum naturale）であるということを喚起している。身体はたとえば家のような，部分の寄せ集めや組み合わせによる一つのものなのではなく，その身体を完成している一つの形相を持つがゆえに一つの身体なのであり，身体のどの部分も，固有の形相から存在と種（esse et species）を受け取るような仕方で，魂から存在と種を受け取っ

_____. “The Unity of Body and Soul“ in Brian Davies ed. *Aquinas's Summa Theologiae Critical Essays*. London: Rowman & Littlefield Publishers, 2006.

White, Kevin. “Aquinas on the Immediacy of the Union of Soul and Body.“ in *Studies in Thomistic Theology*, ed. Paul Lockey (Houston: Center for Thomistic Studies, University of St. Thomas, 1995), 209-280.

石田隆太「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第四項 試訳」『古典古代学』第 8 号（筑波大学大学院 人文社会科学研究科 古典古代学研究室，2016 年）

稲垣良典『トマス・アクィナス哲学の研究』（創文社，1970 年）

川添信介『トマス・アクィナスの心身問題』（知泉書館，2009 年）

[3] 拙稿「「魂は媒体を介して物体的質料と合一されているのであるか―トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 9 問題について―」『南山神学』第 45 号（在名古屋教皇庁認可神学院・南山大学キリスト教学科，2022 年）pp. 51-85 を参照。

ているのである[4]。それに対して家の形相は，諸々の人工物と同じように附帯的形相（forma accidentalis）にすぎないのであり，家の全体にも各々の部分にも存在と種を与えるものではない。家全体は集合による一つなのであって，端的な意味での一つではないのである。一方，身体の形相である魂は実体的形相であり，身体の全体にも，その各々の部分にも，存在と種を与えているのである。それゆえ，諸々の部分から構成されている身体全体は端的な意味での一つなのである[5]。

トマスはアリストテレスの教説に基づき，身体に存在と種を与えている形相すなわち魂は，身体から離れて存在しているのではなく，身体と共に身体の内に存在しているのでなければならないと言う。魂は身体全体の形相なのであるから，魂は身体全体の内に存在している。さらに魂は，形相として身体のどの部分にも存在と種を与えているのだから，身体のどの部分の内にも存在しているのでなければならないのである[6]。それゆえ，トマスは，もし魂が身体のどの部分の形相でもあるならば，単に身体全体の内に存在するだけでなく，また身体の一部分の内にのみ存在するのでもなく，身体のどの部分の内にも存在しているのでなければならないと結論づけている[7]。

トマスはまた，「魂は器官的な身体の現実態である」というアリストテレスによる魂の定義も[8]，そのことを指し示していると言う。なぜなら，器官的な身体

---

[4] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 151-158. 身体と家との相異については ad 16 にも述べられている。

[5] *QDA*, q. 10, ad 16.

[6] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 168-173.

[7] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 173-175. トマスが「魂は身体の内に存在する」(anima est in corpore)と言う時，それは「魂が身体に包まれて存在している」という意味ではなく，むしろ逆に，「魂が身体を包んでいる」という意味において理解するべきである。次の箇所を参照。*ST* I, q. 52, a. 1, cor.:「天使は，やはりそうした理由から，場所によって包まれるのであってはならない。けだし，非物体的実体が自らのちからによって物体的事物に触れる場合，この事物を包むのであって，この事物によって包まれるのではない。魂が身体においてあるのも，「包むもの」としてであって「包まれるもの」としてではないのである。」日下昭夫訳『神学大全』4（創文社，1973 年）

[8] アリストテレス『魂について』II, 412b4-6

は様々に異なる諸々の器官によって構成されており，魂はそれら諸々の器官すべての現実態なのだからである。もし魂が形相としてどれか一つの器官のみの現実態であるならば，他の器官は別の形相によって完成されたものであることになり，それでは身体は一つの自然的全体ではなく，部分の組み合わせによる全体でしかないことになってしまう。それゆえ，魂は身体全体の内に存在し，かつ身体のどの部分の内にも存在しているとしなければならないとトマスは主張するのである[9]。

次に②について，すなわち，はたして魂の全体が，身体全体および身体のどの部分の内にも存在しているのか否かについて考察するにあたり，トマスは全体性（totalitas）には三通りの意味があることを指摘している。それは，ものが諸々の部分を持つことに適合する三つの仕方に基づく三通りの意味である[10]。

第一の仕方は，或るものが量的な分割によって，すなわち数的にもしくは分量的に分割されて，諸部分を持つという仕方である。しかし，このような分割に基づいた全体性は附帯的な仕方でしか形相には適合しないとトマスは言う。たとえば白い物体の表面のような連続体が分割されることによって，白という形相が附帯的な仕方で分割されるような場合である[11]。このような量的な諸部分との関係によって全体性が捉えられるならば，形相の全体が物体のどの部分にも存在しているのではなく，物体全体において形相の全体が存在し，物体の各部分には言わば形相の各部分が存在しているのである[12]。しかし，このような意味での全体性は人間の魂には当てはまらないとトマスは主張する。人間の魂

---

[9] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 175-186.

[10] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 189-191.

[11] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 191-198.

[12] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 211-218. 全体性に関して，形相と質料が複合体の部分と言われ，類と種差が種の部分と言われる場合のような「本質の部分」との関係における全体性と，或る量がそれに分割される「量の部分」との関係における全体性との違いについては，*ST* I, q. 8, a. 2, ad 3 を参照。もし白が「本質の全体性」という意味で捉えられるならば，表面のいかなる部分においても，その種の完全性に即して，白は全体として存在している。しかしもし全体性ということが，白が附帯的に有している「量の全体性」の意味で捉えられるならば，白は表面のいかなる部分においても全体として存在しているわけではないのである。

は数としての量の分割によって分割されるようなものではなく，連続体の分割によって分割されるものでもないからである。切断された後にも切断された部分に魂が存続し，切断された部分が生きている環形動物のような場合とは違い，人間の身体は切断された部分は生きていない[13]。それは，その切断された部分が魂から切り離されてしまうからである。アリストテレスも言っているように，魂から切り離されると目も手足も身体のどんな部分も，もはや同名異義的な仕方でしかそう呼ばれ得ないのである[14]。

第二の仕方は，たとえば質料と形相が複合体の部分と言われる場合のように，種の本質的な諸部分との関係によって或るものが全体と言われるような場合である。この全体性とはつまり，種の完全性を成り立たせている主要な構成部分をすべて備えているということである。トマスはこの仕方の全体性は諸々の単純な本質にも帰属せしめられ得ると言う。ちょうど複合体が本質的な諸部分の結合によって完全な種を有するのと同様に，諸々の非物体的単純実体と単純形相はそれ自体として完全な種を有しているからである[15]。

第三の仕方は，或るものが有している諸々の能力や力との関係によって全体と言われる場合である。それぞれの能力や力がその全体の諸部分であり，これらの部分はそれぞれのはたらきの違いによって区別される[16]。魂の諸部分と言われる場合の諸部分とは，魂の本質の分割された諸部分という意味ではなく，身体の様々な部分すなわち諸々の器官を用いて魂がはたらきをなす，その諸々の能力のことである[17]。

---

[13] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 229-237. 環形動物などの場合は切断された諸部分にも魂が存続していて生きていることについては arg. 15 および ad 15 を参照。

[14] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 158-161.

[15] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 198-207. Cf. *ST* I, q. 8, a. 2, ad 3:「非物体的実体の場合には，自体的意味においても附帯的意味においても，全体性は本質の完全な定義に関してのみ認められる。それゆえ魂が身体のいかなる部分においても全体的に存在しているように，神はすべての部分にも個々の部分にも全体的に存在するのである。」山田晶訳『トマス・アクィナス 神学大全 I』（中央公論新社，2014 年）

[16] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 207-210.

[17] トマスは，アリストテレスも魂の諸部分についてそれを魂の諸能力と捉えていたと解している。Ad 9 を参照。

以上のことからトマスは，人間の魂の全体性に関しては，第二と第三の仕方で完全性を捉える仕方，すなわち種の完全性に基づいて捉える仕方と，能力あるいは力に基づいて捉える仕方，この二つの仕方でしか捉えることはできないとしている[18]。

トマスによれば，種の完全性に基づいて捉えられる全体性に関して言えることは次のことである。種の完全性は魂の本質に即して魂に属している。そして魂は自らの本質に即して身体の形相である。さらに，身体の形相であることに即して魂は身体のどの部分の内にも存在している。ここから帰結するのは，魂の全体が，種の完全性の全体ということに即して，身体のどの部分の内にも存在しているということである[19]。

しかしながら，もし能力や力との関係に基づいて全体性ということが捉えられるならば，魂の能力の全体が身体のどの部分の内にも存在しているのではなく，また身体全体の内に魂の能力の全体が存在しているのでもないとトマスは言う。なぜなら，人間の知性的魂は，それ自体としては非物体的にして自存するところのものなのであり[20]，身体の受容能力（capacitas）を超出しているのであるから[21]，身体と共同することなく行うはたらきを，たとえば知性認識や意志するはたらきを，人間の魂は有しているからである。つまり知性と意志の能力に関して言えば，それらの能力は身体のどれかの器官の内に存在しているのではない。しかしその他の，身体器官を用いてはたらきを行う魂のすべての能力に関する限りにおいては，魂のそうした能力の全体が身体の全体の内に存在しているのである[22]。

ただし，トマスによれば，魂の持つそうした能力の全体が，身体のどの部分の内にも存在しているのではい。身体の様々に異なる諸部分，すなわち諸々の器官は，魂の様々に異なる能力にちょうど適したものとなっているからである。

---

[18] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 238-241.
[19] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 242-248.
[20] Cf. *ST* I, q. 75, a. 1, cor.
[21] この点については *QDA*, q. 1 および q. 2 において明らかにされている。
[22] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 249-260.

それゆえ，身体のそれぞれの部分の内には，魂がその部分を用いて行うはたらきに関係する能力のみをもって，魂は存在しているのである[23]。たとえば見る能力は眼にあり，聞く能力は耳にある[24]。つまり魂は，本質においては一つであり単純なものであるが，様々に異なる能力を持っている。魂は身体の形相として身体のあらゆる部分に存在と種を与える。それゆえ，魂は自らが有している様々に異なるはたらきに適合するように，様々に異なる部分を身体に構成しているのである[25]。そして，身体の様々に異なる部分の内に，様々に異なる能力をもって，魂は存在しているのである[26]。

翻訳と註

トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 10 問題[27]

---

[23] *QDA*, q. 10, cor., Leonina, u. 260-266.

[24] *QDA*, q. 10, arg. 13 を参照。

[25] *QDA*, q. 10, ad 2 および ad 17 を参照。

[26] *QDA*, q. 10, ad 13 を参照。

[27] 本訳は Leonina 版，すなわち，B. C. Bazán ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita,* Tomus XXIV-1, *Quaestiones Disputatae de anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし，註の多くもこの版に依拠した。しかし次の二つの版も常に参照し，Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの，さほど重要ではないと思われる異同については一々註記しなかった：James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones De Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestiones Disputatae De Anima* in *Quaestiones Disputatae,* vol. 2, 10th edition (Turin: Marietti, 1965). 以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また，翻訳にあたっては，以下の現代語訳を参照した。John Patrick Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001). 以降 Rowan 訳，Robb 訳，および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版を用いた翻訳，Robb 訳は本人の校訂版を用いた翻訳，Vernier 訳は Leonina 版を用いた翻訳である。

なお，本稿で用いるトマス・アクィナスの著作とその略号は次の通りである。*Quaestiones disputatae de anima* (*QDA*), *Quaestiones disputatae de veritate* (*QDV*), *Quaestiones disputatae de potentia* (*QDP*), *Quaestio disputata De spiritualibus creaturis* (*De spir. creat.*), *Quaestiones disputatae De malo* (*De malo*), *Super Librum De causis* (*In De causis*), *Sententia Libri De anima* (*In De anima*), *Sententia super Meteora* (*In Meteor.*), *Sententia super Metaphysicam* (*In Metaph.*), *Sententia super Physicam* (*In Phys.*), *Sententia super librum De caelo et mundo* (*In De*

「魂は身体全体の内に存在し，かつそのどの部分の内にも存在しているのであるか」

第 10 問題では，魂は身体全体の内に存在し，かつそのどの部分の内にも存在しているのであるか否かが問われる[28]。そして〔その答は〕否であるようにも思われる。なぜなら，

【異論】

(1) 魂は身体の内に，完全性が「完成され得るもの」（perfectibile）の内に存在するような仕方で存在している。しかるに，魂によって完成され得るものとは器官的な物体（corpus organicum）である。なぜなら，『魂について』第二巻に述べられているように[29]，魂とは，可能的に生命を持つ，器官的な自然的物体の現実態なのだからである。それゆえ，魂は器官的な物体の内にしか存在しない。しかるに，身体のあらゆる部分が器官的な物体であるわけではない。したがって，魂は身体のあらゆる部分の内に存在しているのではない[30]。

---

caelo.),*Expositio Libri Posteriorum* (*In Anal. Post.*), *Scriptum super libros Sententiarum* (*SSS*), *Summa theologiae* (*ST*), *Summa contra gentiles* (*SCG*), *Quaestiones de quolibet* (*Quodl.*), *Compendium theologiae* (*CT*), *De unitate intellectus contra Averroistas* (*De unitate intellectus*), *De ente et essentia* (*De ente*), *De substantiis separatis* (*De subst. Separ.*), *Super Boethium De Trinitate* (*In De Trinitate*). テキストは *SSS* に Mandonnet et Moos 版を，*QDP*, *SCG*, *In Metaph.*, *In Phys.*, *In De caelo* に Marietti 版を，*In De causis* に Saffrey 版を用いた他は，すべて Leonina 版を用いた。

28 *QDA*, q. 10 の平行箇所として Leonina 版は次の箇所を挙げている。*SSS* I, d. 8, q. 5, a. 3; *SCG* II, c. 72; *ST* I, q. 76, a. 8; *In De anima* I, 14; *De spir. creat.* a. 4.

29 アリストテレス『魂について』II, 412a27-28:「それゆえ魂とは「可能的に生命をもつ自然的物体の，第一次の終極実現状態」と規定される。」；412b5-6:「そこで，魂のすべてにわたって何らかの共通する事柄を語らなければならないとすれば，それは「道具的な性格の自然的物体の，第一次の終極実現状態」ということになるだろう。」中畑正志訳『アリストテレス全集』7（岩波書店，2014 年）

30 Cf. *ST* I, q. 76, a.8, arg. 2; *De spir. creat.* a. 4, arg. 13

(2) 更に。形相は質料に調和適合したものである。しかるに魂は，身体の形相である限りにおいて，或る単純な本質である。それゆえ，複合的な質料は魂に適していない。ところが，人間の身体であれ動物の身体であれ，身体の様々な部分は相互に大きな違いを有しているのであるから，複合的な質料と同様である。それゆえ，魂は身体のどの部分の形相でもない。したがって，魂が身体のどの部分の内にも存在しているということはない。

(3) 更に。全体の外に，付け加わるものは何もない[31]。したがって，もし魂の全体が身体のどこかの部分の内に存在しているのなら，その部分の外には魂に属するものは何も存在しない。それゆえ，魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているということは不可能である。

(4) 更に。哲学者（アリストテレス）は『動物の運動の原因について』において次のように言っている[32]。「〔魂と身体の各部分との関係について言えば〕動物〔の身体器官〕は法律によってうまく治められている正しい国家のようなものだと考えるべきである[33]。なぜなら，国家においては一度秩序が確立されてしまえば，もはや個々の君主は必要がないのであり――つまり，生じる事柄一つ一つのための君主が存在する必要はない――[34]，むしろ各々の人が自分自身の仕事を割り当てられた仕方で行い[35]，慣習によって次々と仕事がなされて行くのである。動物たちにおいても，これと同じことが自然本性によってなされるのであり，それは各部分が定められた自分の仕事を行うように生まれついているからである。それゆえ，各々の部分

---

31 Cf. *ST* I, q. 8, a. 2, arg. 3:「その全体が或る所に存在するものは，そのいかなる部分もその場所の外には存在しない。」山田晶訳『トマス・アクィナス 神学大全 I』（中央公論新社，2014 年）

32 アリストテレス『動物の運動について』703a29-b2

33 Leonina 版は Existimandum，Robb 版と Marietti 版は Aestimandum.

34 Leonina 版は monarcho — quem，Robb 版は monarcha; quem，Marietti 版は Monarcha; quoniam.

35 Leonina 版は ipse *quilibet* facit *que* ipsius *sicut* ordinatum est，Robb 版は ipse *quodlibet* facit *quod auctoritate* ipsius ordinatum est，Marietti 版は *per se quilibet* facit *quod auctoritate* ipsius ordinatum est. イタリックは筆者。

の内に魂が存在している必要はなく，むしろ魂は身体の或る始源の内に存在し，他の諸部分はそれに生まれつきつながっているがゆえに生きているのであり[36]，自然本性によって各々自らの仕事を行っているのである。」それゆえ，魂は身体のどの部分の内にも存在しているのではなく，一つの部分の内にのみ存在しているのである[37]。

(5) 更に。哲学者（アリストテレス）は『自然学』において[38]，天体を動かすものは天体の中央か周転円上か，そのどちらかに存在していなければならない，なぜなら，この二つが円運動における原理だからであると述べている。そして，動かすものが天球の中央に存在していることはあり得ず，周転円上に存在していることを明らかにしている。なぜなら，周転円に近いものほど，そして中心から遠いものほど，その運動はより速いからである。それゆえ同様に，動物を動かすものは[39]，動物において運動がとりわけ明瞭である部分の内に存在しているのでなければならない。それは心臓である。それゆえ，魂は心臓の内にのみ存在しているのである。

(6) 更に。哲学者（アリストテレス）は『若さと老いについて』において，植物は栄養摂取能力の始源を上部と下部の中間に持つと述べている[40]。しかるに，植物において上部と下部があるのと同様に，動物においても上部と

---

36 Leonina 版は adnata sunt，Robb 版と Marietti 版は apta nata sunt.

37 Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, arg. 1; *De spir. creat.* a. 4, arg. 1

38 アリストテレス『自然学』VIII, 267b6-9:「運動変化させるものは天球の中央か，あるいは周転円上かのいずれかに位置していなければならない。これらが円〔球〕の〔生成的〕原理をなすものだからである。しかし，運動変化させるものの最も近くにあるものが，最も速く運動変化する。そして最も速いのは天球の運動変化である。したがって，運動変化させるものは天球のところに存在する。」内山勝利訳『アリストテレス全集』4（岩波書店，2017 年）

39 Leonina 版は motor animalis，Robb 版と Marietti 版は motus animae.

40 アリストテレス『若さと老いについて』I, 467b30-468a5:「共通な感覚器官は「前部」および「後部」と呼ばれる部分の中間であるだろう（「前部」と言われるのは，われわれにとって感覚があるところであり，「後部」は，その反対側であるから）し，さらにまた，あらゆる生きものの体は上体と下体によって区分される（実際，すべての生きものは上体と下体をもち，したがって，植物もまたそれらをもつ）のであるから，すべての生きものは，栄養摂取能力のある始原を，それら上体と下体の中間においてもつであろうということは明らかである。」坂下浩司訳『アリストテレス全集』7（岩波書店，2014 年）

下部，右部と左部，前部と後部がある。それゆえ生命の始源である魂は，動物におけるこれらの部分のまん中に存在しているのでなければならない。それは心臓である。したがって，魂は心臓の内にのみ存在しているのである。

(7) 更に。或るものの全体において存在し，かつそのどの部分にも存在しているような形相はすべて，その全体も各部分も同じ名で呼ばれる。そのことは，たとえば火の場合に明らかである。火はそのどの部分も火なのだからである。しかし，動物の身体の各部分は動物とは呼ばれない。それゆえ，魂は身体のどの部分の内にも存在しているのではない。

(8) 更に。知性認識は魂の或る部分に属している。しかし，知性認識は身体のどこかの部分においてなされるのではない[41]。それゆえ，魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているのではない。

(9) 更に。哲学者（アリストテレス）は『魂について』第二巻において，魂の部分と身体の部分との関係は，魂全体と身体全体との関係と同様であると述べている[42]。それゆえ，もし魂が身体全体の内に存在しているのであれば，魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているのではなくて，魂の各部分が身体の各部分の内に存在していることになるであろう[43]。

(10) ところが〔この論に対して〕，哲学者（アリストテレス）は動者である限りにおける魂とその部分について述べているのであって，形相である限りにおける魂とその部分について述べているのではないという意見があった。

---

41 Cf. *ST* I, q. 77, a. 5, cor.:「魂の諸々のはたらきのなかには，身体の器官なしに遂行されるごときものも存在しているのであって，知性認識 intelligere や意志 velle のはたらきのごときがすなわちそれである。」大鹿一正訳『神学大全』6（創文社，1969 年）

42 アリストテレス『魂について』II, 412b12-25:「そこで，部分について成り立つことを，生きている身体の全体に当てはめて理解しなくてはならない。というのも，視覚という感覚の部分と眼という身体の部分との関係は，感覚全体と感覚をなしうる――そのように特定されるかぎりでの――身体全体との関係に対して類比的だからである。」（中畑訳）

43 Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, arg. 3:「『デ・アニマ』第二巻にいうところでは，魂の部分が身体の部分に対するのは――たとえば視覚が瞳に対するのは――，ちょうど魂全体が動物の身体全体に対するごとくである。もし，それゆえ，魂全体が身体のどの部分にも存在するとするならば，身体のどの部分もが動物であることになるであろう。」（大鹿訳）

——それに対する反論。哲学者（アリストテレス）はその同じ箇所で，もし眼が動物であるとすれば，視覚がその眼の魂ということになると言っている[44]。しかるに，魂は動物の形相である。それゆえ，魂の部分は身体の内に形相として存在しているのであって，単に動者として存在しているのではない。

(11) 更に。魂は動物における生命の根源である。それゆえ，もし魂が身体のどの部分の内にも存在しているのだとすれば，身体のあらゆる部分が魂から生命を無媒介的に受け取っていることになり，そうすると，生きることにおいて一つの部分が他の部分に依存しているのではないことになる。しかし，それは明らかに偽である。なぜなら，身体の他の諸部分は生きることにおいて心臓に依存しているからである[45]。

(12) 更に。身体の動きによって，その身体の内に存在している魂は附帯的な仕方で（per accidens）動かされる。同じように，身体が静止することによって，その身体の内に存在している魂は附帯的な仕方で静止する。ところが，身体の一部分が静止している時に他の部分が動かされるということがある。したがって，もし魂が身体のどの部分の内にも存在しているのであれば，

---

[44] アリストテレス『魂について』II, 412b18-20:「以上述べられたことを，身体の諸部分についても当てはめて考察しなければならない。すなわち，かりに眼が動物であるとすれば，視覚がその眼の魂ということになるであろう。なぜなら，視覚は眼の説明規定に対応する意味でその本質存在であり，これに対して眼は視覚の素材であって，視覚が離れ去るともはや眼ではないからである。」（中畑訳）

[45] Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, arg. 5:「もし，身体のどの部分においても魂全体が存在しているとするならば，身体のどの部分もが無媒介に魂に依存することになるであろう。それゆえ，一つの部分が他の部分に依存することはなく，また一つの部分が他の部分に比してより根源的であるというごときこともありえないことになる——。こうしたことは然し明らかに偽である。」（大鹿訳）；*De spir. creat.* a. 4, arg. 8:「もし魂が身体のいかなる部分にもあるならば，身体の各々の部分は魂に対して無媒介の秩序を持つだろうし，その場合，他の諸部分は心臓に依存しないことになるが，それは，「人間の主要部は，プラトンの言うように脳にあるのではなくて，キリストの言うように心臓にある」と『「マタイによる福音書」注解』で述べるヒエロニュムスとは反対である。」石田隆太訳『古典古代学』第 8 号（筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室，2016 年）

魂は動かされていると同時に静止していることにならざるを得ないが，それは不可能であると思われる[46]。

(13) 更に。魂のすべての能力は魂の本質に根ざしたものである。それゆえ，もし魂の本質が身体のどの部分の内にも存在しているのであれば[47]，魂のすべての能力が身体のどの部分の内にも存在していなければならないことになる。しかし，それは明らかに偽である。なぜなら，聞く能力は眼にはなく耳にのみあるのであり，他の能力についても同様だからである[48]。

(14) 更に。他のものの内に存在しているものはすべて，それがその内に存在しているところのものの仕方にしたがって存在している。それゆえ，もし魂が身体の内に存在しているのであれば，魂は身体の仕方にしたがってその内に存在しているはずである。しかるに身体の仕方とは，一つの部分が存在する所には他の部分は存在しないような仕方である。それゆえ，魂の一つの部分が存在している所には魂の他の部分は存在しない。したがって，魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているのではない。

(15) 更に。環形動物（animalia anulosa）と呼ばれる或る不完全な動物は，切断された後も，身体のどの部分の内にも魂が存続しているがゆえに[49]，〔それらの部分は〕生きている[50]。しかし，人間および他の完全な動物においては，

---

46 Cf. *De spir. creat.* a. 4, arg. 7

47 Leonina 版と Marietti 版は essentia anime/animae，Robb 版は esse animae.

48 Cf. *De spir. creat.* a. 4, arg. 3; *ST* I, q. 76, a. 8, arg. 4:「魂の能力はすべて魂の本質そのものに根ざすものである。もし，それゆえ，魂全体が身体のどの部分にも存在しているとするならば，魂のあらゆる能力が身体のどの部分にも存在することになり，かくては，視覚が耳のうちに存在するし，聴覚が眼のうちに存在するということになるであろう。こうしたことは不都合である。」（大鹿訳）

49 Leonina 版と Marietti 版は propter hoc quod anima remanet, Robb 版は propter hoc quod *in eis* anima remanet. イタリックは筆者。

50 Cf. アリストテレス『魂について』I, 411b19-22:「また植物や，動物のなかでも一部の有節動物は，切断されても生きていることが観察され，そのことは切断された諸部分が，数的には異なるとしても，それが属する〈種〉において同一の魂をもっていることを含意している」（中畑訳）。中畑の解説によれば，有節動物とは「主として昆虫を指すが，それ以外にも，多足類，クモ類，環形動物，扁形動物など節をもった動物の総称である。」（『アリストテレス全集』7，61 頁，註 36 参照）

切断された部分は生きていない。それゆえ，人間および他の完全な動物においては，魂は身体のどの部分の内にも存在しているのではない。

(16) 更に。人間と動物〔の身体〕が異なる部分から成る一つの全体であることは，一つの家と同様である。しかるに，家の形相は家のどの部分の内にも存在しているのではなく，家全体において存在している。それゆえ，動物の形相である魂もまた，魂の全体は身体のどの部分の内にも存在しているのではなく，身体全体において存在しているのである。

(17) 更に。魂は身体の形相である限りにおいて身体に存在を与えている。しかるに，魂は自らの本質に即して身体の形相なのであり，その本質は単純である[51]。それゆえ，魂は自らの単純な本質に即して身体に存在を与える[52]。しかし，一つのものからは自然的に一つのものしか生じない。したがって，もし魂が形相として身体のどの部分の内にも存在しているとするならば，魂は身体のどの部分にも一様な存在（esse uniforme）を与えていることになってしまうであろう。

(18) 更に。形相は質料と，場所に置かれたものとその場所よりも，より親密に合一されている。しかるに，一つの場所に置かれたものが別のいくつもの場所に同時に存在することはできない。このことは離在的実体であってさえもそうである[53]。と言うのも，一人の天使が同時にいくつもの場所に存在することは学匠たちが認めていないからである[54]。それゆえ，魂もまた身体のいくつもの部分の内に同時に存在することはできないのである。

---

[51] 魂は形相と質料から複合されたものではなく，単純形相（forma simplex）である。これについては *QDA*, q. 6「魂は形相と質料から複合されたものであるか」を参照。

[52] Leonina 版と Robb 版は secundum suam essentiam simplicem，Marietti 版は per suam essentiam simplicem.

[53] Leonina 版と Marietti 版は etiam *si sit* substantia spiritualis，Robb 版は etiam substantia spiritualis. イタリックは筆者。

[54] トマスもまた，天使が同時にいくつもの場所にあることができることを認めていない。次の箇所を参照。*SSS* I, d. 37, q. 3, a. 2:「一人の天使がいくつもの場所にあることができるか」；*ST* I, q. 52, a. 2:「一人の天使が同時にいくつもの場所にあることができるか」。

【反対異論】

(1) しかし反対に。アウグスティヌスは『三位一体論』において，魂は全体が身体全体の内に存在しており，また魂の全体が身体のどの部分の内にも存在していると述べている[55]。

(2) 更に。魂は，身体と合一されている限りにおいてでなければ，身体に存在を与えない。しかるに，魂は身体全体に存在を与えており，また身体のどの部分にも存在を与えている。それゆえ，魂は〔合一されているその〕身体全体の内に存在し，また身体のどの部分の内にも存在しているのである。

(3) 更に。魂は，存在している所でなければ，はたらきをなさない。しかるに，魂のはたらきは身体のどの部分にも見られる。それゆえ，魂は身体のどの部分の内にも存在しているのである。

【解答】

解答。この問題の真理は一つ前の問題の結論に依拠している。なぜなら，その問題において，魂は身体の形相である限りにおいて，何らかの身体部分の媒介によって身体全体と合一されているのではなく，無媒介的に身体全体と合一されていることが明らかにされたからである[56]。その理由は，魂は身体全体の形相でもあり，また身体のどの部分の形相でもあるからである。このことをここでもまた主張しなければならない。人間の身体も他のどの動物の身体も，身体は一つの自然的全体（totum naturale）なのであるから，それを完成している一つの形相を持つがゆえに一つの身体と言われるのであり[57]，たとえば家などの

---

[55] アウグスティヌス『三位一体論』VI, 6, 8:「魂が物体よりも単一であるのは，場所的に広がる塊ではなく，どの身体においても全体としてある全体であり，身体のどの部分においても全体として存在するからである。」泉治典訳『アウグスティヌス著作集』28（教文館，2004 年）

[56] *QDA*, q. 9:「魂は媒体を介して物体的質料と合一されているのであるか」を参照。

[57] Cf. アリストテレス『形而上学』V, 1016b12-14:「或る意味ではわれわれは，どのようなものでも，それらがどれだけかの量をもつ連続したものであれば，それらを一つであると言うが，しかし或る意味ではそう言わない。すなわち，もしそれらが或る全体的なもので

ような単なる寄せ集め（aggregatio）によるものでも組み合わせ（compositio）によるものでもないのである。それゆえ，人間と動物の身体のどの部分も，固有の形相から存在と種を受け取るような仕方で，魂から存在と種を受け取るのであるとしなければならない。

それゆえに哲学者（アリストテレス）は，魂が離れ去ると，眼も体も他のどんな部分も，もはや同名異義的な意味でしかそう呼ばれないと言っているのである[58]。また，ものがその存在と種を，形相から受け取るような仕方で，何らかの離在的なものから受け取ることは不可能である。（この考えは，こうした可感的諸事物は離在する諸形相の分有によって存在と種を受け取っていると主張したプラトンの説に似ている[59]。）そうではなくて，形相はそれが存在を与えているものが持っているものでなければならない[60]。なぜなら，形相と質料はものの本質を成り立たせている内的な根源だからである[61]。それゆえ，アリストテレス

ないならば，言いかえればもしそれらが一つの形相〔形相の統一性〕を有しないならば，一つであるとは言わない。たとえば，靴の諸部分がただ勝手に寄せ集められているのを見ては，われわれはそれらをもひとしく同様に一つ〔一つの靴〕であるとは言わない。」出隆訳『アリストテレス全集』12（岩波書店，1968 年）

58 アリストテレス『魂について』II, 412b17-22:「以上述べられたことを，身体の諸部分についても当てはめて考察しなければならない。すなわち，かりに眼が動物であるとすれば，視覚がその眼の魂ということになるであろう。なぜなら，視覚は眼の説明規定に対応する意味でその本質存在であり，これに対して眼は視覚の素材であって，視覚が離れ去るともはや眼ではないからである。それがかりに「眼」と呼ばれるにしても，石製の眼や描かれた眼が「眼」と呼ばれる場合のような，同名異義的な意味でしかない。」（中畑訳）

59 Cf. アリストテレス『形而上学』I, 987-b1-10:「〔プラトンは〕次のような理由から，このことは或る別種の存在についてなさるべきことで感覚的な存在については不可能であると認めた。その理由というのは，感覚的事物は絶えず転化しているので，共通普遍の定義はどのような感覚的事物についても不可能であるというにあった。そこでプラトンは，あの別種の存在をイデアと呼び，そして，各々の感覚的事物はそれぞれその名前のイデアに従いそのイデアとの関係においてそう名づけられるのであると言った。けだし，或るイデアと同じ名前をもつ多くの感覚的事物は，そのイデアに与かることによって，そのように存在するというのであるから。」（出訳）なお，Leonina 版は Platonis positioni，Robb 版は platonicae positioni，Marietti 版は Platonicorum positioni.

60 Leonina 版と Marietti 版は aliquid eius cui *dat* esse，Robb 版は aliquid ejus cui *datur* esse. イタリックは筆者。

61 Cf. *De ente,* cap. 2

が言っているように[62]，もし魂が形相として身体のどの部分にも存在と種を与えているのであれば，魂は身体のどの部分の内にも存在していなければならないのである。そしてこの理由により，魂は身体全体の内に存在していると我々は主張する[63]。なぜなら，魂は身体全体の形相だからである。そして，もし魂が身体のどの部分の形相でもあるならば，単に身体全体の内に存在するだけでなく，また身体の一部分の内にのみ存在するのでもなく，身体のどの部分の内にも存在しているのでなければならないのである。魂は器官的な身体の現実態であるという魂の定義もまた[64]，このことを指し示している[65]。すなわち，器官的な身体は様々に異なる器官によって構成されている。それゆえ，もし魂が形相として身体の一部分の内にのみ存在しているとするならば，それは器官的な身体の現実態ではなく，たとえば心臓などのような身体の一部分のみの現実態であることなり，その他の身体部分はそれぞれ別の形相によって完成されたものであることになる。しかしそれでは，身体は一つの自然的全体ではなく[66]，部分の組み合わせによる一つの全体でしかないことになってしまう。したがって，

---

62 アリストテレス『魂について』II, 412b17-25:「以上述べられたことを，身体の諸部分についても当てはめて考察しなければならない。すなわち，かりに眼が動物であるとすれば，視覚がその眼の魂ということになるであろう。なぜなら，視覚は眼の説明規定に対応する意味でその本質存在であり，これに対して眼は視覚の素材であって，視覚が離れ去るともはや眼ではないからである。それがかりに「眼」と呼ばれるにしても，石製の眼や描かれた眼が「眼」と呼ばれる場合のような，同名異義的な意味でしかない。そこで，部分について成り立つことを，生きている身体の全体に当てはめて理解しなくてはならない。というのも，視覚という感覚の部分と眼という身体の部分との関係は，感覚全体と感覚をなしうる――そのように特定されるかぎりでの――身体全体との関係に対して類比的だからである。」（中畑訳）

63 Leonina 版は *dicimus* animam esse in toto，Robb 版と Marietti 版は *dicitur* anima esse in toto. イタリックは筆者。

64 アリストテレス『魂について』II, 412b4-6:「魂のすべてにわたって何らかの共通する事柄を語らなければならないとすれば，それは「道具的な性格の自然的物体の，第一次の終極実現状態」ということになるだろう。」（中畑訳）

65 Leonina 版は *hoc* diffinitio anime *ostendit*, Robb 版は *haec* definitio animae *ostendit*, Marietti 版は *haec* definitio animae *convenit*. イタリックは筆者。

66 Leonina 版は unum quid *naturale*, set *compositione* tantum，Robb 版は unum quid *naturale* sed *compositum* tantum，Marietti 版は unum quid *naturaliter*, sed *compositione* tantum. イタリックは筆者。

残されるのは，魂は身体全体の内に存在し，かつ身体のどの部分の内にも存在しているということなのである。

しかし，魂の全体（anima tota）が身体全体の内に，かつ身体のどの部分の内にも存在しているのか否かということも問われているのであるから[67]，このことについても，どのように述べられるべきかを考察しなければならない[68]。全体性（totalitas）は，或るものが部分を持つことに適合する三つの仕方に基づいて，三通りの仕方で形相に帰属せしめられ得る[69]。第一の仕方は，量的な分割によって，すなわち数的にあるいは分量的に分割されて，部分を持つという仕方である。しかしながら，数の全体性も量の全体性も，おそらく附帯的な仕方でしか，一つの形相には適合しない。それはたとえば，白い表面の分割によって白が分割されるごとく，連続体（continuum）の分割によって形相が附帯的に分割されるような場合である。

第二の仕方は，種の本質的な諸部分との関係によって或るものが全体と言われる場合である。たとえば，質料と形相が複合体の部分と言われ，また類と種差が或る意味で種の部分と言われる場合のように。そして，この仕方の全体性は諸々の単純な本質にも，それ自体の完全性のゆえに帰属せしめられる。なぜなら，ちょうど複合体が本質的な諸根源の結合によって完全な種を有するのと同様に[70]，諸々の単純実体と単純形相は，それ自体として完全な種を有しているからである[71]。

---

[67] Leonina 版と Marietti 版は an sit tota in toto *et* in qualibet parte eius，Robb 版は an sit tota in toto *vel* in qualibet parte ejus. イタリックは筆者。ちなみに，本問題の並行箇所における問いでは次のような表現が用いられている。*SSS* I, d. 8, q. 5, a. 3「魂の全体が身体の全体の内に存在し，かつ魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているのであるか」; *SCG* II, c. 72「魂の全体が身体全体の内に存在し，かつ魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているということ」; *ST* I, q. 76, a. 8「魂は身体のどの部分においても全体として存在しているのであるか」; *De spir. creat.* a. 4「魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているのであるか」。

[68] Leonina 版は qualiter dicitur et hoc，Robb 版と Marietti 版は qualiter hoc dicitur.

[69] 全体と部分の関連については *ST* I, q. 8, a. 2, ad 3 を参照。

[70] Leonina 版は habent perfectas species, Robb 版と Marietti 版は habent perfectam speciem.

[71] 本質の全体性については，山田晶訳『トマス・アクィナス 神学大全 I』第 8 問第 2 項，305 頁註 12 を参照：「「本質の全体性」totalitas essentiae とは，それなしにはそのもの

第三の仕方とは，諸々の力あるいは能力の諸部分との関係によって或るものが全体と言われる場合である。これらの部分は，それぞれのはたらきの違いに基づいて区別される。

それゆえ，もし形相が連続体の分割によって分割されるごときものとして捉えられ，物体のどの部分の内にもその形相の全体が存在しているのかが問われるならば，たとえば，白い表面のどの部分にも白の全体が存在しているのか否かが問われるならば，つまり，もし量的な諸部分との関係によって全体性が捉えられるならば――このような全体性は，附帯的な仕方で白に帰属しているのであるが――, 形相の全体が物体のどの部分の内にも存在しているのではなく，物体全体の内に形相の全体が存在し，そして物体の各部分の内に形相の各部分が存在しているのである[72]。だが，もし種に帰属しているような全体性について問われるのであれば，たとえば白は全体においてもどの部分においても等しく白であるように, 形相の全体が物体のどの部分の内にも存在しているのである。しかし，力に関する限りにおいては，形相の全体がどの部分の内にも存在しているのではないことは真実である。たとえば，表面の一部分における白は，表面全体における白ほど〔瞳を〕広げる力はないのであり[73]，小さな炎における熱は，大きな炎における熱ほど熱する力はないのである[74]。

の本質が成り立たないような本質構成要素の全体である。或る物の本質の全体性は，その物の属する「種」species の定義の内容の全体をなす。「白き物体」においては，その表面のいずれの部分においても「白」がその種の完全な定義によって見いだされるから，「本質の全体性」に関していうならば，「白」は表面の到る所において「全体的に」存在する。」

72 Cf. *De spir. creat.* a. 4, cor.:「もし質料において延長を持つ或る形相について――例えば白さ〔という形相〕について――われわれが語っているとすれば，本質や力の全体性という点ではその形相全体がいかなる部分にもある一方で，その形相にとっては附帯的である第一の全体性という点ではそうでないとわれわれは言うことができるだろう。例えば，白さという種の理拠全体は表面のいかなる部分にも見出される一方で，白さが附帯的に持つ量全体はそうではなくて，量は部分として部分において見出される。」（石田訳）

73 Cf. *ST* I, q. 30, a. 4, cor.:「それはちょうど，もし白 album がそれ自体で瞳を広げるならば，いっそう白いものはいっそう多く広げるごとくである。」森啓訳『神学大全』10（創文社，1995 年）

74 Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, cor.:「つまり，もしこれが量的な全体性――「白」はこれを附帯的な仕方で持っている――をいうものであるとするならば，「白」は決して表面のいずれの部分においても全体として存在しているわけではない。またちからの全体性についてもこ

ここで差し当たり人間の身体の内にはただ一つの魂のみが存在していると仮定するならば（このことについては，この後に究明される[75]），人間の魂は数としての量の分割によって分割されるのではない[76]。また，魂が連続体の分割によって分割されるのではないことも明らかであり，このことは，切断された身体の部分が生きていない，完全な動物の魂において，とりわけ明らかである。しかし[77]，おそらく環形動物たちの魂の場合はそうではないのであろう。哲学者（アリストテレス）が説明しているように，これらの動物においては，〔身体が切断される前の〕魂は，現実態においては一つであるが，可能態においては複数なのである[78]。以上のことから帰結するのは，人間の魂およびあらゆる完全な動物の魂においては，魂の全体性は，種の完全性に基づいて捉える仕方，そし

れと同様にいわなくてはならないであろう。表面の全体に存するところの「白」は，表面の或る一小部分に存するところの「白」よりも，より以上の仕方で視覚を動かしうるわけだからである。」（大鹿訳）

75 *QDA*, q. 11:「人間において理性的魂，感覚的魂，自育的魂は一つの実体であるか」

76 「数」としての量と「連続的な大きさ」としての量については次の箇所を参照。Thomas, *In Metaph.* V, lect. 15, #978; アリストテレス『形而上学』V, 1020a7-32:「もののポソン〔量，本来の語義はどれだけ，いかほど，等々の意〕というのは，それらの各部分が自然的に或る一つのものであり，またはこれと指し示されうるものであるところの或る幾つかの内在的構成部分に分割されうるもののことである。そしてそのどれだけあるかが〔すなわちその量が〕（一）数えられうるときには，その数えられる量は「多さ」であり，（二）計られうる量であるときには，この量は「大きさ」である。多さというのは可能的に非連続的な部分に分割されうるものの場合であり，大きさというのは連続的な部分に分割されうるものの場合である。大きさのうち，一次元的に連続的なそれは「長さ」であり，二次元的なそれは「広さ」であり，三次元的なそれは「深さ」である。またこれらのうち，限られた多さは数であり，限られた長さは線，広さは面，深さは物体〔立体〕である。」（出隆訳）

77 Leonina 版は autem，Robb 版と Marietti 版は enim.

78 アリストテレス『魂について』II, 413b16-22:「なぜなら，植物の場合に，切断され，さらに互いに分離されても明らかに生きているのが観察されるからであり――そのことは切断された部分に内在する魂が，切断前のそれぞれの植物においては，終極実現状態としては一つであるが可能的には複数であるということを示すものである――。われわれはそれと同様な事実が魂の他の種類の場合にも起こるのを，有節動物の切断された諸部分においても観察できる。」（中畑訳）

て能力あるいは力に基づいて捉える仕方，この二つの仕方でしか捉えられ得ないということである[79]。

それゆえ，我々は次のように主張する。種の完全性は魂の本質に即して魂に属しているのであり，魂は自らの本質に即して身体の形相なのであり，またすでに明らかにされたように[80]，身体の形相であることに即して魂は身体のどの部分の内にも存在しているのであるから，ここから帰結することは，魂の全体が，種の完全性の全体ということに即して，身体のどの部分の内にも存在しているのだということである。

しかしながら，もし全体性ということが力（uirtus）と能力（potestas）との関係に関する限りにおいて捉えられるならば，魂の全体が身体のどの部分の内にも存在しているのではない。そして人間の魂について言えば，身体全体の内に魂の全体が存在しているのでもない。なぜなら，先のいくつかの問題において明らかにされたように[81]，人間の魂は身体の受容能力（capacitas）を超出しているため，知性認識するはたらきと意志するはたらきのように，身体と共同することなく行うはたらきを魂は有しているからである。つまり，知性と意志は何らかの身体器官のはたらきなのではない。しかし，魂が身体器官を用いてはたらく，その他諸々のはたらきに関する限りにおいては，魂の力と能力の全体が身体全体の内に存在しているのである。ただし，身体のどの部分の内にも魂の力と能力の全体が存在しているのではない。なぜなら，様々に異なる身体の各部分が，魂の様々に異なるはたらきにちょうど適しているからである[82]。それ

---

[79] Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, cor.:「だが，第二の意味における全体性，すなわち，概念や本質の完全性に即して認められるごとき全体性は，本来的そして自体的に形相に適合する。また，ちからの全体性もこれと同様である。形相は，はたらきの根源だからである。」（大鹿訳）

[80] 本問題 解答の最初の段落（Leonina, u. 149-158）を参照。

[81] *QDA*, q. 1 および q. 2 を参照。

[82] Leonina 版と Marietti 版は ad diuersas/diversas operationes anime/animae，Robb 版は ad diversas operationes animae *exercendas*. イタリックは筆者。

ゆえ[83]，身体の各部分の内には，魂がその部分を用いて行うはたらきに関係する能力のみという仕方で，魂は存在しているのである[84]。

【異論への解答】

(1) 第 1 の論に対しては次のように言わなければならない。質料は形相のために存在するのであり[85]，形相は固有のはたらきへと秩序づけられているのであるから，各々の形相の質料は，その形相のはたらきに適しているような質料でなければならない。たとえば，のこぎりの質料は鉄のような質料でなければならないが，それは，その硬さがのこぎりの仕事に適しているからである。それゆえ，魂は自らの能力の完全性のゆえに様々に異なるはたらきを行うことができるのであるから，その質料は魂の様々に異なるはたらきに適した諸々の部分から成る身体でなければならない[86]。この諸々の部分が器官と呼ばれるのであり，そしてこのことのゆえに，魂が形相として根源的な仕方で関わっている身体全体が，器官的身体なのである[87]。部分は，しかし，全体のために存在する。それゆえ，身体の各部分は，各々が魂の固有で主要な完成され得るものであるかのように魂と関わっているのではなく，全体への秩序づけを有している限りにおいて関わっているのである。それゆえ，魂は身体のあらゆる部分

---

83 Leonina 版と Marietti 版は Vnde/Unde，Robb 版は Tamen.

84 Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, cor.:「魂は，いまいうごとく，自体的にも附帯的にも量的な全体性を持たないのであってみれば，我々は，魂は，完全性や本質の全体性に関するかぎり，身体のどの部分においても全体として存在するのであり，ちからの全体性に関するかぎりにおいては，然し，そうはゆかない，といえば足りる。つまり，魂は，そのどのような能力に即しても身体の任意の部分に存在しているわけではなく，それは却って，視覚に関するかぎりは眼において存在し，聴覚に関するかぎりは耳において存在し，その他の場合もこれに準ずるのだからである。」（大鹿訳）

85 Cf. *QDA*, q. 8, cor.; *ST* I, q. 47, a. 1, cor.:「質料は形相のために存在するのであって，その逆ではない。」日下昭夫訳『神学大全』4（創文社，1973 年）

86 Cf. *SCG* II, cap. 72, #1486

87 Leonina 版は organicum，Robb 版と Marietti 版は organum.

の形相であるが，しかし，身体のあらゆる部分が[88] 器官的身体である必要はないのである[89]

(2) 第 2 の論に対しては次のように言わなければならない。質料は形相のために存在するのであるから，形相は自らのはたらきに適するような仕方で質料に存在と種を与える。そして，魂によって完成され得るものである身体は，魂の様々に異なるはたらきに適するために，それぞれの部分が様々に異なっている必要がある。それゆえに魂は，自らの本質に関する限りにおいては一つであり単純であるが，身体の各部分を様々に異なる仕方で完成するのである。

(3) 第 3 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は身体の一つの部分の内に，すでに述べたような仕方で存在しているのであるから[90]，身体のこの部分の内に存在している魂の外には，この魂に属している力と能力は存在しない[91]。しかしだからと言って，身体のこの部分の外に，魂に属する力と能力が何も存在しないということにはならない。そうではなく，魂に属する力と能力が何も存在しないのは，魂が根源的な仕方で完成している身体全体の外なのである。

(4) 第 4 の論に対しては次のように言わなければならない。その箇所で哲学者（アリストテレス）は，魂の動かす能力に関する限りの事柄について語っているのである[92]。身体の運動の根源は身体の或る一つの部分の内に，すな

---

88 Leonina 版と Robb 版は qualibet pars corporis，Marietti 版は qualibet pars animalis.

89 Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, cor.:「我々は次のことを注意しなくてはならない。すなわち，魂はこれら諸部分の相違性を必要とするものゆえ，身体の全体に対すると諸部分に対するとでは関わりあいの仕方が同じではないのであって，身体の全体に対しては，第一次的なそして自体的な仕方で，つまりそれを自己に固有なそして自己に対比した「完成さるべきもの」perfectibile としてこれに関わるのであるが，部分に対しては，より後なる仕方で，つまりそれが全体に対して秩序づけを有しているものたるかぎりにおいてこれに関わるのである。」（大鹿訳）

90 本問題解答の末尾部分（Leonina, u. 263-266）を参照。

91 たとえば，魂の見る能力は眼の内にのみ存在し，聞く能力は耳の内にのみ存在する。

92 Cf. *ST* I, q. 76, a. 8, ad 1:「アリストテレスは魂の「動かす能力」について語っているのである。」（大鹿訳）

わち心臓の内にあり，魂はその部分を通して身体全体を動かしている。このことは彼が挙げている支配者についての例から明らかである。

(5) 第 5 の論に対しては次のように言わなければならない。天体を動かしているものは，その実体に関する限りにおいては，次元的な場所に限定されたものではない[93]。しかし哲学者（アリストテレス）が明らかにしようとしているのは，動かすことの始源である限りにおいて，天体を動かしているものがどこに存在しているのかということである。そして，これと同様の意味で，魂は運動の始源である限りにおいて，心臓の内に存在しているのである。

(6) 第 6 の論に対しては次のように言わなければならない。植物においてさえも魂は，諸々のはたらきの始源である限りにおいて，その上方と下方の中央に存在していると述べられている[94]。動物においても，そのことは同様である。

(7) 第 7 の論に対しては次のように言わなければならない。火はそのどの部分も火と呼ばれるのに，動物の場合はその身体のどの部分も動物と呼ばれるのではないことの理由は，火においては，火のはたらきのすべてが火のどの部分においても保持されているが，動物においては，動物のはたらきのすべてが動物のどの部分においても保持されているのではないからである。このことは，とりわけ完全な動物においてそうである。

(8) 第 8 の論に対しては次のように言わなければならない。この論が結論づけているのは，魂はその力に関する限り，その全体が身体のどの部分の内に

---

93 Cf. アリストテレス『自然学』VIII, 266a10-12:「ところで，この第一に運動を引き起こすものが部分を持たず，いかなる大きさをも持たないものでなければならないことを，今度は論ずることにして，まずはじめにその議論に先立つ事柄について詳しく規定しておこう。」; 267b17-18:「さて，これらのことが詳しく規定されてみると，最初に運動変化を引き起こし，それ自体としては不動不変なるものが何らかの大きさを持ちえないことは，明白である。なぜなら，大きさを持つとすれば，それは有限のものであるか，無限のものであるかのいずれかでなければならないからである。」（内山訳）

94 アリストテレス『若さと老いについて』I, 467b30-468a5. 本問題第 6 異論を参照。

も存在しているのではないということである。それが真実であることはすでに述べられた[95]。

(9) 第 9 の論に対しては次のように言わなければならない。哲学者（アリストテレス）は魂の諸部分を，魂の本質に関する諸部分としてではなく，魂の能力に関する諸部分として捉えている。それゆえに彼は，身体全体の内に魂が存在しているのと同様に，身体の部分の内に魂の部分が存在していると言っているのである。それは，器官的身体全体が身体を用いて行う魂のすべてのはたらきに役立つように態勢づけられているように[96]，そのように一つの器官は，或る特定のはたらきのために態勢づけられているからである[97]。

(10) 第 10 の論に対しては次のように言わなければならない。魂の能力は魂の本質に根ざしたものである。それゆえ，魂のどの能力が存在するところにも，そこには魂の本質が存在している。したがって，哲学者（アリストテレス）の，もし眼が動物であるとすれば[98]，視覚がその眼の魂ということになるという言葉を，魂の本質を度外に置いて魂の能力について述べていると理解するべきではない。同様に，感覚的魂が身体全体の形相であると言われるのは，魂の本質のゆえにそう言われるのであって，魂の感覚的能力のゆえにそう言われるのではない。

(11) 第 11 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は，或る最初の一つの部分を通して[99]，その他の諸部分においてはたらきをなすのであり，

---

[95] 本問題の解答の末尾部分（Leonina, u. 249-266）を参照。

[96] Leonina 版は omnibus operationibus，Robb 版と Marietti 版は omnibus を欠く。

[97] Leonina 版と Robb 版は ad aliquam determinatam operationem，Marietti 版は ad unam determinatam operationem.

[98] Leonina 版は si oculus esset animal，Robb 版と Marietti 版は si oculus animalis esset animal.

[99] Leonina 版と Robb 版は per aliquam unam *primam*，Marietti 版は per aliquam unam *potentiam*. イタリックは筆者。

アリストテレスが『魂について』第二巻で言っているように[100]，身体の作動因である魂のはたらきによって，魂に適合するように身体は構成されているのであるから[101]，その他の部分の態勢は，これらが魂によって完成され得るものである限りにおいて，最初の一つの部分すなわち心臓に依存しているのでなければならない。これほど，その他の諸部分の生命は心臓に依存しているのである。と言うのも，どの部分においてであれ，必要とされる態勢が存在しなくなれば，魂は形相としてその部分と合一されなくなるからである。しかしながら，このことによって，魂が無媒介的に身体のあらゆる部分の形相であるということが排除されるわけではない[102]。

(12) 第 12 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は附帯的な仕方でしか，身体の動きや静止によって動かされたり静止したりすることはない[103]。しかるに，附帯的な仕方であれば，何かが動かされているのと同時に静止していることは不合理なことではない。それは，たとえば誰かが船の中で船の進む方向とは逆の方向に運ばれる場合のように，何かが附帯

---

[100] アリストテレス『魂について』II, 415b8-12:「ところで，魂は生きている身体の原因であり始原であるが，原因や始源は多くの意味で語られる。同様に魂は，すでに区別された仕方に応じて，三つの意味で原因である。すなわち魂は（1）そこから動（運動変化）が始まる始原として，（2）「それのために」という目的として，また（3）魂をもつ身体の本質的あり方（本質存在）として，原因なのである。」（中畑訳）

[101] Leonina 版は proportionatum *anime*, Robb 版は proportionatum *esse*, Marietti 版は proportionatum *esse animae*. イタリックは筆者。

[102] Robb による英訳では，最後のこの一文（Non autem propter hoc . . . cuiuslibet partis corporis.）の訳が欠落している。

[103] Cf. アリストテレス『魂について』I, 406a12-b15:「ところで動（運動変化）には四つの種類，すなわち場所運動，性質変化，減少と増大があるから，魂が動くとすればこれらの動のうちの一つ，あるいは複数，あるいはそのすべてのいずれかの仕方で動くことになるだろう。そしてその動きが付帯的なものではないとすれば，動は魂に自然本性的に帰属することになるだろう。だがもしそうだとすれば，魂には場所も帰属することになるだろう。なぜなら，先に言及された動はすべて，場所のうちにあるからである。〔中略〕他方，付帯的な動についてならば，魂は確かに他のものによって動かされてそのような動きをすることもあるだろう。実際，動物は力によって強制的に押しやられることがあるだろうから。しかし，自己自身によって動くことがその本質的あり方のうちに存するものにとって，それが他の者によって動かされるということは，付帯的に動くという場合を除けば，あるはずのない事態である。〔後略〕」（中畑訳）

的な仕方で反対の動きによって動かされることが不合理なことではないのと同様である。

(13) 第 13 の論に対しては次のように言わなければならない。魂のすべての能力は魂の本質に根ざしたものであるが，身体の各部分はそれぞれの仕方で魂を受け取る。それゆえ，様々に異なる部分の内に，様々に異なる能力をもって魂が存在しているのであり，一つの部分の内にすべての能力をもって魂が存在している必要はない[104]。

(14) 第 14 の論に対しては次のように言わなければならない。他のものの内に存在しているものはすべて[105]，それがその内に存在しているところのものの仕方にしたがって存在していると言われるのは，受容能力（capacitas）に関する限りにおいてそうであるのだと理解するべきであり，性質（natura）に関する限りにおいてそうであるのではない。なぜなら，他のものの内に存在しているものが，それがその内に存在しているところのものの性質と特性を持つ必要はないからである。そうではなくて，そのものの受容能力にしたがって，その内に受け取られるのである。たとえば，瓶の中の水が瓶の性質を持つわけではないことは明らかである。したがって，一つの部分が存在する所に他の部分は存在しないといった身体の性質を魂が持つ必要はないのである。

(15) 第 15 の論に対しては次のように言わなければならない。切断された環形動物たち〔の身体の諸部分〕が生きている理由は，身体のどの部分にも魂が存在しているからであるだけでなく，その動物たちの魂が不完全であり少ないはたらきしか持たないために[106]，諸部分における多様性を少ししか必要としていないからである。この多様性の少なさは切断されても生きて

---

[104] Leonina 版は in *una* secundum omnes，Robb 版は in *unaquaeque* secundum omnes，Marietti 版は in *unaquaque* sit secundum omnes. イタリックは筆者。

[105] Leonina 版と Marietti 版は esse in alio，Robb 版は esse in aliquo.

[106] Leonina 版は paucarum operationum，Robb 版と Marietti 版は paucarum actionum.

いる身体部分の内にも見られる[107]。それゆえ，魂によって身体全体が完成され得るような態勢をその切断された部分が保持しているので，その部分の内に魂が存続しているのである[108]。しかし，完全な動物においてはそうではない。

(16) 第 16 の論に対しては次のように言わなければならない。家の形相は，他の諸々の人工物の形相と同じように，附帯的形相である。それゆえ，家の全体にも，その各々の部分にも，存在と種を与えるものではない。家全体は端的な意味での一つなのではなく，集合による一つなのである。しかし，魂は身体の実体的形相なのであり，身体の全体にも，その各々の部分にも，存在と種を与えている。そして，諸部分から成る身体全体は，端的な意味での一つである。それゆえ，身体は家と同様ではない。

(17) 第 17 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は本質においては一つであり単純なものであるが，様々に異なるはたらきを行う力を持っている[109]。また，魂は本質的に身体の形相である限りにおいて，自然的に自らの完成され得るものに存在と種を与える[110]。そして自然的に存在するものは，目的のために存在する[111]。それゆえ，魂が様々に異なるはたらきに適合するように様々に異なる部分を身体に構成するのは当然のことである。また，その存在理由が目的によるものであって形相だけによるものではないこのような多様性のゆえに，自然が目的のためにはたらくということが，一つの形相が自らの完成され得るものを一様な仕方で完成している他の自然的諸事物においてよりも，生命あるものの構成において，より明白であることは真実である。

---

107 Leonina 版と Robb 版は in parte decisa uiuente/vivente，Marietti 版は in parte decisa a vivente.

108 Leonina 版は in ea anima，Robb 版と Marietti 版は in eo anima.

109 Leonina 版と Marietti 版は virtutem，Robb 版は virtutes.

110 Leonina 版と Marietti 版は dat esse et speciem，Robb 版は dat esse in specie.

111 自然によって生じたり存在したりしているものには「何かのために」という目的が存在している。このことについてはアリストテレス『自然学』II, 198b34-199b33 を参照。

(18) 第 18 の論に対しては次のように言わなければならない。魂と天使の単純性を点（punctum）の単純性と同じような意味で捉えてはならない。点は連続体の内に限定された位置を持つのであり，単純単一であるがゆえに，連続体の異なる諸部分に同時に存在することはできないのである。それと異なり，天使と魂は量（quantitas）を全く持たないということによって単純なものと言われるのであり，それゆえ連続体へと赴くのは力の接触によってのみである[112]。したがって，天使は形相としてそれと合一しているのではないが，天使が力によって接触している〔連続体の〕その全体は[113]，天使にとって一つの場所（locus unus）となっているのである。そして，形相として〔身体と〕合一されている魂にとって，〔身体全体は〕完成され得る一つのもの（perfectibile unum）となっているのである。そして，天使が自らの場所のどの部分の内にも全体として存在しているのと同様に，魂は自らの完成され得る身体のどの部分の内にも全体として存在しているのである。

（以上）

---

[112] Cf. *ST* I, q. 52, a. 1, cor.:「天使にもやはり「場所においてある」ということが適合する。ただ，「場所においてある」ということが天使の場合と物体の場合とでは同名異義的に語られる。〔中略〕天使には，然るに，次元的な量なるものはそもそも存在せず，そこに見いだされる量は，ちからの大小という量でしかない。天使が物体的な場所においてあるといわれるのも，それゆえ，天使のちからが，或る場所にまで――それがいかなる仕方においてであれ――赴いているということのゆえであるほかはないのである。」日下昭夫訳『神学大全』（創文社，1973 年）

[113] Leonina 版と Robb 版は uirtute/virtute contingitur，Marietti 版は virtute angeli contingitur.

Whether a Soul exists in the Whole body and in Each of Its Parts.

On Thomas Aquinas' *Quaestiones disputatae de anima*, q. 10

Jun INOUE

In this question 10, Thomas discusses whether the whole soul exists in the whole body and in each of its parts. Thomas answers this question considering the three-fold meaning of the totality according to the three ways in which a thing can be said to have parts. (1) A thing has parts as a result of quantitative division, that is, according as a number or a magnitude is divided. But the totality of number or magnitude can apply to a form only being divided accidentally as whiteness is divided by dividing a surface. (2) A thing can be called a whole in relation to the essential parts of its specific nature, as matter and form are called parts of a composite. This kind of totality is also attributed to simple essences by reason of their perfection, because just as composites have a perfect species from the union of their essential principles, so also do substances and simple forms which have a perfect species in virtue of themselves. (3) A thing can be called a whole in relation to the divisions of its power or capability, and these parts are distinguished from one another in accordance with a division of operations.

Thomas maintains that in the case of the human soul, totality can be used only in reference to the perfection of the species and in reference to power or capability. Since the soul by its own essence is the form of its body, and since as form of its body it is in every part of its body, it follows that the whole soul is in every part of the body according to the whole of its specific perfection.

However, if totality is used in reference to power or capability, in this sense a soul is not wholly in every part of the body. In all the soul's operations (except the operations of the intellect and will), which the soul carries out through bodily organs,

its whole power and capability is in the whole body but not in each part of the body, because diverse parts of the body are fitted to diverse operations of the soul. Consequently, a soul is in a particular part of the body according to that power only which is directed towards the operations which the soul carries out through that part of the body.

I give also a translation of the *Disputed Questions on the Soul*, q. 10. This translation is based on the 1996 Leonine edition: B. C. Bazan (ed.), *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita, Tomus XXIV-1, Quaestiones Disputatae de Anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996).